

令和 8 年度 徳島県 英語教育改善プラン

目標

「英語が好き」という気持ちを原動力に、小・中・高の12年間を見通した系統的な学びを推進し、一人ひとりの「伝えたい」に寄り添う「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を具現化する。

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☒ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☒ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①R6全国学力・学習状況調査の質問調査の結果によると、「英語の授業の内容はよく分かる」と回答した児童は78.9%と全国平均を上回っており、多くの児童が主体的に英語学習に取り組んでいる状況を裏付けるものといえる。

②R5英語教育実施状況調査の結果によると、授業時間の75%以上を言語活動に充てている教員の割合が増加しており、実践的な指導体制の構築が進んでいる。

(参考:R4:39.4%⇒R5:54.8%)

未だ改善が必要な点

① R6全国学力・学習状況調査の結果によると、「英語の勉強は大切だと思う」と回答したのは92.2%と高い割合を占めているのに対し、「英語の勉強が好き」と回答したのは71.2%にとどまった。

②ICTの活用は少しずつ進んでいるものの、依然として補助的活用に留まっており、児童が自律的に情報を収集・発信したり、汎用型AIとの対話を通じて個別に言語活動を深化させたりするなど、高度な活用には至っていない。

2. 要因分析

①ICTの活用によりネイティブな音声や視覚的な資料に触れる機会が増えて児童の興味・関心が高まったことや、「聞く・話す」を中心とした体験的な活動の定着によって学習への心理的ハードルが下がったことが、主体的な学習態度を支える大きな要因になっていると考える。

②「個別最適な学び」の重視や現行学習指導要領の考え方の定着により、知識の伝達だけでなく、児童が英語を実際に使う場面を確保する意識が高まったことが背景にある。併せて、ALTの参画やICTの活用によって、教員が自信をもってアウトプット中心の授業を構成できる環境が整ってきたことも大きな要因になっていると考える。

①児童が既習事項を「活用」して達成感を得るための、「真正性の高いコミュニケーションの機会」の創出が不十分であることが大きな要因と考える。単なる反復練習に留まり、児童の「伝えたい」という切実な思いを引き出す場面設定に至っていない点が課題である。

②端末の導入自体が目的化し、教科の特性に応じた「思考や対話のツール」としてICTを使いこなすための具体的な授業デザインや、教員の指導スキルの習得が追いついていないことが要因と考える。また、汎用型AI等の先端技術に対してリスクを懸念する、教員の慎重な姿勢が、児童の自律的な学びを支える高度な活用の妨げとなっている。

3. 目標を達成するための施策・事業

「Tokushima X(クロス)-Link Project」の推進 (小・中・高)

児童生徒の多様な実態に合わせ、汎用型AIを「学びのパートナー」として活用することで、自律的な学習調整能力の育成と「個別最適な学び」の実現を目指す。

①体験的な言語活動の質の向上と発話機会の確保

多様な対話の相手やICT・汎用型AIを効果的に組み合わせ、全授業時間の75%以上を言語活動に充てる体制を維持・発展させる。特に、児童が心理的ハードルを感じずに英語の音やリズムに親しめるよう、ICT・汎用型AIを用いた良質なインプットと、友達や教員との「伝え合う」喜びを実感できるリアルな対話を連動させた、アウトプット中心の授業デザインを推進する。

②教員の指導力向上と組織的な指導体制の強化

ICT・汎用型AIを効果的に活用するための「個別最適な学び」の視点を取り入れた研修会を実施し、知識の伝達に留まらない、児童が英語を実際に「使う」場面の設計スキルを向上させる。また、専科教員や学級担任が連携する「チーム学校」としての取組を深化させ、県域アカウントによる実践知の共有等を通じて、教員が自信をもって実践的な指導にあたることができる環境を構築する。

①「真正性の高いコミュニケーション」を創出する授業改善

単なる反復練習から脱却し、児童が「伝えたい」という切実な動機をもてるような、目的・場面・状況を設定した「本物の言語活動」を導入する。汎用型AIを活用し、個々の興味・関心に応じた対話相手やトピックを提供することで、既習事項を活用して「伝わった」という達成感を味わえる成功体験を積み重ねる。

②汎用型AI (Gemini) 等の高度活用とリテラシーの育成

ICTを単なる提示用ツールから「思考や対話を深化させるツール」へと転換するため、汎用型AIを「学びのパートナー」として活用する実践モデルを構築する。教員向けに安全な活用ガイドラインを整備するとともに、AIとの対話を通じた自律的な学習調整能力を育成する指導法を共有し、本県全体の教育力の向上を加速させる。

(参考URL : <https://www.pref.tokushima.lg.jp/compass-private-/>)

令和 8 年度 徳島県 英語教育改善プラン

目標

目標と指導と評価の一体化を徹底し、言語活動の充実を中心とした授業改善を行う。

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合（R7：51.8%⇒R8：60%）

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☒ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☒ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①英語担当教員の英語力の向上について、改善が見られる。
(R6: 62.7%⇒R7: 67.6%)

②学習者用デジタル教科書の活用について、一定の改善・定着が見られる。
(R5：87.3%⇒R6：97.4%⇒R7：97.4%)

①国が求める英語力を有する生徒の割合CEFR A1
(R6: 53.2%⇒R7: 51.8%)

②R5全国学力・学習状況調査正答率 ※()は全国平均

領域	聞くこと	57.2% (58.4%)
読むこと	49.4% (51.2%)	
書くこと	25.3% (23.4%)	
観点	知・技	52.0% (51.5%)
	思・判・表	37.3% (38.8%)

③授業内外における英語学習のためのAI活用状況
(R7：51.3%)

2. 要因分析

①研修会等を通じて教師の英語力の重要性を伝えるとともに、検定試験の活用を周知したこと、また、教員採用審査における「英語特別選考」を実施等が、中学校英語科教員の英語力向上につながったと考えられる。
②教育課程研究集会での参加者による学習者用デジタル教科書の活用事例を共有した。

①R6全国学力・学習状況調査における生徒質問調査の結果から、各領域において、「言語活動を実施した」と回答した割合が全国平均を下回っており、十分に言語活動が実施できていないことが原因の一つと考えられる。

①②指導と評価の一体化に難しさを感じている教員もあり、教員を対象としたアンケートでは、「パフォーマンステストについて十分に理解できていない」という意見も見られ、原因の一つと考えられる。

③英語教育におけるAIの活用について、教員が理解を深め、授業に十分に活かしてきていないという現状がある。

3. 目標を達成するための施策・事業

①
○研修会等をととして教師の英語力の重要性を継続して伝えていく。また、各種検定試験の周知や教員採用審査における「英語特別選考」を引き続き実施する。

②
○言語活動の充実に向けて、学習者用デジタル教科書の活用事例の共有を継続するとともに、学校訪問等においても活用の推進に向けて指導助言を行う。

①
○英語能力向上事業として英検IBAを実施し、生徒の学習状況を把握し、指導や評価の改善につなげるとともに、客観的なデータに基づき、生徒の英語力を見取る際の参考として活用する。

○各研修会や研究会、学校訪問等の様々な機会を通して、国や県が提供している授業実践等の共有を行い、言語活動の充実を図る。

②
○教育課程研究集会等を通して、各評価観点（特に「思考・判断・表現」）についての理解を深め、授業改善へとつなげていく。また、令和8年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、「中学校英語科授業づくり研修会」を全校悉皆で実施し、結果の分析に基づき、指導と評価の一体化を念頭に置いた授業づくりの具現化を図っていく。

○県が作成した「指導と評価の一体化」サイトの活用を促進し、参考となる評価問題や授業実践例等を共有し、各学校での活用を推進する。

（参考URL:<https://www.pref.tokushima.lg.jp/compass-private->）

③
○令和8・9年度にわたり、全校悉皆の「Tokushima X-Link Project」をととして、英語科の授業における汎用型AI（Gemini）の効果的な活用方法を学ぶ機会を提供する。

未だ改善が必要な点

令和 8 年度 徳島県 英語教育改善プラン

目標と指導と評価の一体化を促進し、AI等の活用を通じて言語活動のさらなる充実を図る。

○CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R7 : A2以上 57.0%、B1以上 26.8% ⇒ R8 : A2以上 60.0%、B1以上 30.0%)

目標

☒言語活動 ☒指導と評価の一体化 ☒教師の英語力・指導力 ☒校種間連携 ☐ALTの参画 ☒ICTの活用 ☒AIの活用 ☐その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

- ①生徒の英語力
・CEFR A2相当以上
(R6: 56.2% ⇒ R7: 57.0%)
・CEFR B1相当以上
(R6: 26.4% ⇒ R7: 26.8%)
- ②授業におけるICT機器を活用した言語活動（人との文字でのやり取り）
(R6: 46.4% ⇒ R7: 64.3%)
- ③CEFR C1レベル相当以上の英語力を有する英語担当教師の割合
(R6: 19.5% ⇒ R7: 20.0%)
- ①授業における英語担当教員の英語使用状況
(R6: 55.8% ⇒ R7: 50.0%)
- ②授業内外における、英語学習のためのAIの活用状況
(R6: データなし ⇒ R7: 82.1%)
- ③CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教師の割合
(R6: 94.0% ⇒ R7: 92.3%)

2. 要因分析

- ①②について、(1) 目標と指導と評価の一体化を目指した授業づくり（論理・表現）の工夫について、(2) 「書くこと」の指導と生成AIの活用について、(3) 「深い学び」の充実について、をテーマとして、マイクロティーチング等を取り入れた全校悉皆の授業研究会を実施し、目標・指導・評価の一体化が改善した。
- ①②③について、英語科主任会や教育課程研究集会、学校訪問で、英語教育実施状況調査における本県の実況を説明し、授業改善および教師の英語力の重要性を確認した。
- ①について、学年が上がるに伴い、全科目において英語担当教師の英語使用が低下する状況が見られ、特に、「論理・表現」における英語使用が相対的に低調である。
- ②について、学校間及び担当教師間での活用状況に差異が見られる。
- ③について、研究会後に実施する英語担当教師のアンケートから、多忙さにより、自己研鑽の機会の確保が難しい状況が見られる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①②③英語指導力向上を目指した研修・研究会を継続して実施。
目標と指導と評価の一体化を促進し、AI等の活用を通じて言語活動がさらに充実した授業実践を推進するため、「授業づくりの工夫と実践のための研究会」を引き続き実施する。
 - ①②
○全科目でのAI活用を通じた授業改善に向け、専門家や先進的な実践に取り組む現職教員を招聘する研究会を実施し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実と、言語活動のさらなる充実を図る。また、研究会の内容や参考Webページ等のダイジェスト版を「指導と評価の一体化サイト」に掲載し、生徒全体の英語力向上とともに、特にグローバルに活躍することが期待される層の拡充を目指す。
 - 教育課程研究集会や英語科主任会等で各校のAI活用の事例を収集し、教師の授業準備・指導・評価や、生徒の授業内外での学習など、活用場面を明確にした上で、実践事例を「指導と評価の一体化サイト」に集約して共有する。また、学校訪問等では、AI活用による授業改善について指導助言を行う。
 - 令和7年度「小中高連携を踏まえた英語教育リーダー」育成事業における研究成果を県内で共有し、他校種における授業実践への理解を深める。
 - ③
○学校訪問や英語科主任会で、英語担当教師が自己研鑽するための情報を提供する。
 - 外国語学会や徳島県英語指導研究会と連携し、英語担当教師が日頃の授業実践や悩みを相談・共有するとともに、各教員が英語力を高められる仲間づくりやネットワークづくりを促進する。
- (参考URL: <https://www.pref.tokushima.lg.jp/compass-private->)

徳島県教育委員会

校種		2023		2024		2025		2026		2027	
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		59	55.1	57	56.2	58	57	60	61	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		22	24.3	26	26.4	28	26.8	30	31	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		75	67.7	72	65	72		74	76	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		65	59.4	60	57.9	62		64	66	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100	100	
		公表（％）	100	86.8	90		100		100	100	
		達成状況の把握（％）	85	94.7	96		100		100	100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		94	94.3	95	94	95	92.3	96	97	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		78	55.2	56	55.8	58	50	60	62	

校種		2023		2024		2025		2026		2027	
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		54	55.4	56	53.2	58	51.8	60	61	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		93	88.8	93		94		95	98	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		100	81.9	85		87		88	90	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100	100	
		公表（％）	100	100	100		100		100	100	
		達成状況の把握（％）	100	100	100		100		100	100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		66	63.4	66	62.7	66	67.6	67	68	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		94	75.9	85		86		88	90	

校種		2023		2024		2025		2026		2027	
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100	100	
		公表（％）	100	90.6	100		100		100	100	
		達成状況の把握（％）	100	98.8	100		100		100	100	